



繪本
田村物語

二

~ 13
3300
2



へ 12
3309
2

奇説 田村物語 卷之二



武關 川上 鯉老 人編輯
下流 梅梢軒 關旭 訂正

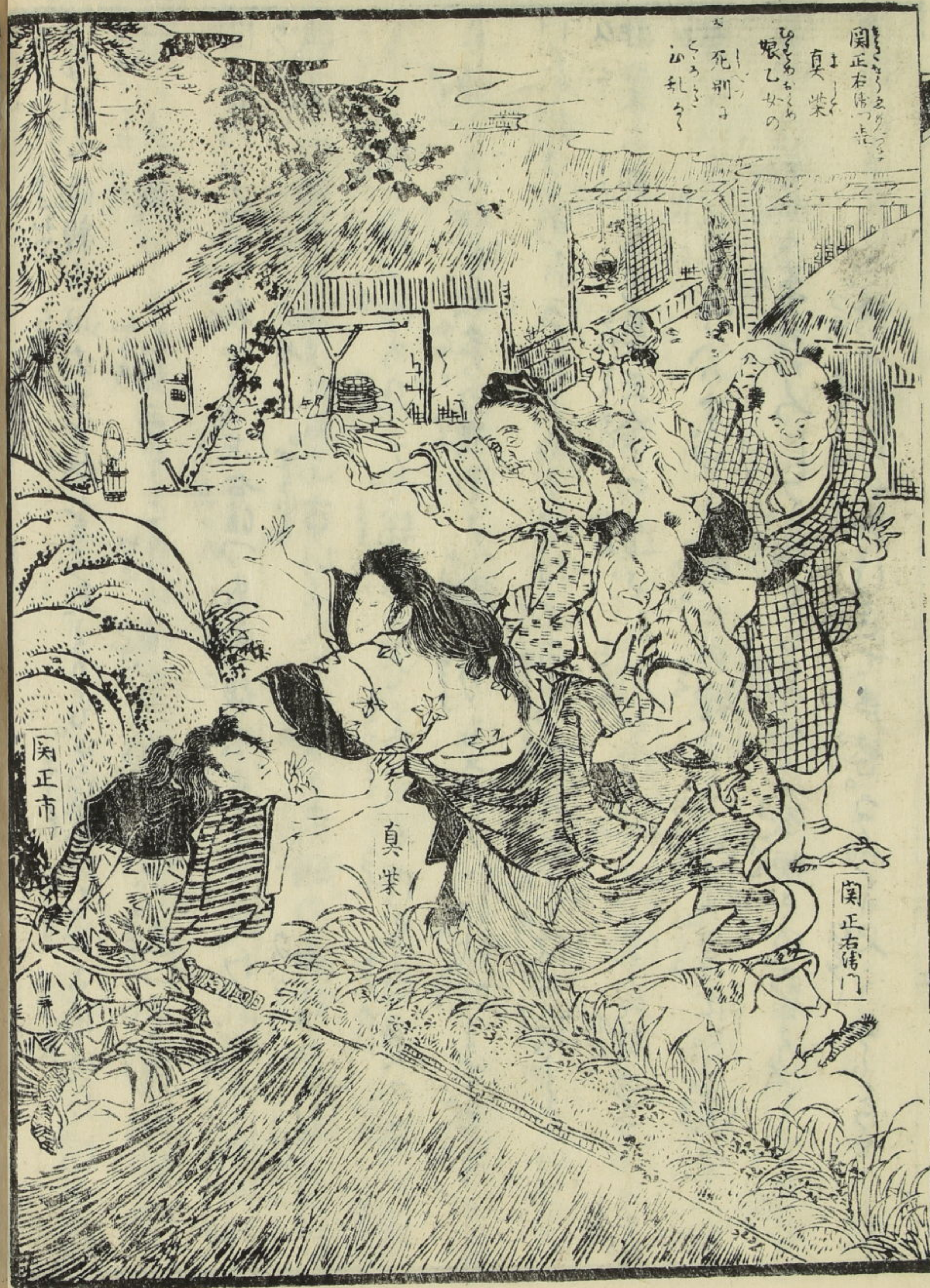
天正十八年
本大學出版部

天命 豈私をばれことを得んや 國正市正秀ハ教ふのうみこ袖の
柵せさあへども 天悲しみ地に哀みて 毎念の齒がみぬをそとしくども
敵さくさくのうさか。あつて消ゆれ 乙女が遺體を抱さあけ 已が衣敷
を脱て乙女おうち 著我と却つて 赤裸 かり。かり 背負くいとだ
吾屋へ 冷くんと世しが 何あらん 足障りて 蹶さけれ 母忽痛み
おほへり 公怪み 衣のふは 肩くお乙女 押入 石のふと 以て 探
ふと ば たいは くの 足の 將指血は ぬみ 漆て けり。 扱入 木の 根岩 角お

田村物語 卷之二

踏のけりか。木の間をまわす。月影はすじりつれぬ。とがくとも是
一丁の小柄をれを取あげたる。小刀の氷うも光る。月を對して清く。
表は浪路の三文字。記し。柄を金銀をりて。子守の浪は群とぶ。因
を鑄し。西市竊はあり。かかれ人里遠と山踏ふ。いそぐ斯の如
こ小柄の落る。有るは謂はし。はしや又獵師などの落せる。あもせよ。庶
人の持たれ。あももる。げれぬ。はしめり。げなれ。此小柄察する。所は
乙女が音し。賊の松の枝を登り。つ下り。せし折の。取落せ。物る。人
か。尤めれば。敵を求む。便もなれ。べし。悲この中。小。小。しく。力を。ほ。存
を。はして。急ぎ。けり。正右衛門。夫婦。正市。力。ゆる。げ。れ。而。己。り。乙女。え
く。く。これ。何と。や。ん。公。驚。れ。胸。苦。しく。夫婦。門。邊。ふ。ら。出。か。れ。と
こ。た。う。と。尋。求。む。折。か。く。正市。の。ち。ほ。く。と。乙女。が。遺。體。を。脊。負。く。場

すめれぬ。両親と此のりさばをえられ。よりも。志業は乙女に抱けられた。いせぬ
涙の声振。いふ乙女ふくと息の限りの呼ぶれど。法に。夢魂のゆるが
回答のなれ。そと衣なり。正右衛門も前後不足。あふえり。れ。が。先。づ。う。泪。押
拭。奉。の。始。末。は。尋。ね。れ。れ。西。市。の。い。へ。て。乙。女。が。末。期。の。物。語。り。又。眼。ま。は。り
奉。種。の。露。も。残。さ。で。説。終。む。と。志。業。は。持。も。恩。愛。の。胸。に。燈
火。噓。り。い。せ。ぬ。炎。の。煙。も。頼。心。か。も。ま。り。に。伏。沈。む。と。居。る。と
け。斯。く。の。あ。る。と。れ。母。あ。り。孫。は。正。右。衛。門。正。久。容。を。改。め。歎。か。く。い。ら。ん。
非。業。も。死。ぶ。も。是。天。命。の。道。が。所。な。れ。此。う。を。わ。れ。跡。の。ゆ。と。先
勢。は。れ。と。父。子。之。人。へ。す。じ。と。野。辺。の。贈。り。も。懇。切。に。言。じ。よ。志。業。は。鬼
母。か。た。乙。女。が。事。の。な。り。し。く。明。ても。暮。ても。不。便。さ。の。あ。ま。り。く。て。打。卧
た。れ。が。い。と。し。や。終。に。柱。乱。の。公。け。さ。て。声。替。さ。め。く。人。の。あ。ら。う。と。し。や。



関正右衛門
 真柴
 娘の
 死
 乱

関正市

真柴

関正右衛門

おれぬ女子のまことれぞよ。ついでを慕ふてはもろくそよ。さうも
 と知るばか。かみ難れとせば。此物な。あつ恥じや。嫌や。あ。の。我子
 よ。乙女子よ。乳房あ。り。夜。の。鶴の子。ゆふの。あ。黒髪。の。箱を。戴く
 未。ま。ても。笑。あ。れ。花。が。奴。母。細。と。燵。り。れ。弊。戸。あ。も。憂。年。月。の。今。更。ふ
 別。つ。も。あ。れ。形。ば。吾。母。と。い。う。母。な。か。え。ん。と。乱。心。の。う。形。も
 た。よ。う。足。の。よ。ろ。く。と。走。り。出。ん。と。世。所。を。心。を。信。つ。そ。の。子。と。取。て。ま。ろ。と
 川。邊。女。性。と。云。形。が。正。右。清。つ。正。父。が。妻。な。れ。と。難。く。沈。て。公。私。と。そ。の
 命。を。毀。じ。不。孝。と。や。い。ん。下。愚。と。や。云。へ。賢。く。も。其。理。を。顧。て。乙。女。の
 る。の。天。命。と。ゆ。さ。む。む。さ。し。か。つ。も。も。精。神。を。離。り。て。さ。の。か。り。死。成。振。く
 ぞ。う。い。ひ。と。教。諭。の。言。兼。教。度。正。市。諸。と。も。勞。ま。く。夜。具。打。差。つ。破
 屏。風。引。廻。して。一。間。の。あ。ら。う。に。休。せ。せ。れ。が。さ。の。柴。と。猶。も。一。た。を。悲。み

如。と。度。と。奴。の。鬼。母。も。角。も。か。る。に。じ。く。食。次。終。と。と。日。御。の。い。ん
 成。宿。世。の。報。ひ。母。や。と。十。八。を。一。期。して。眠。ふ。が。あ。と。く。お。母。の。り。め。れ。ふ
 正。市。の。悲。ま。は。い。も。は。り。形。り。云。古。書。つ。も。同。ド。歎。き。に。伏。あ。介。み
 づ。ぐ。う。二。旬。も。さ。さ。る。母。炊。臼。墜。毫。の。憂。を。か。さ。の。輾。と。は。小。鉄
 石。も。蹇。く。日。毎。よ。寺。小。ま。あ。で。れ。む。と。印。の。塚。も。中。に。埋。ま。ら。ぬ
 名。と。さ。う。母。は。け。て。も。憂。の。救。し。積。ま。る。ま。い。道。よ。り。後。の。正。市。小
 何。と。と。家。の。の。り。も。竹。は。せ。其。外。と。引。籠。り。て。朝。る。さ。な。小。佛
 の。燈。明。香。花。の。向。の。外。小。子。業。も。な。く。さ。う。な。れ。月。日。送。る。
 正。市。信。謂。く。勿。辨。な。や。め。れ。歎。に。達。す。も。我。不。孝。の。な。せ。れ
 所。な。り。其。所。以。如。何。と。な。れ。ば。鶴。翁。の。山。荘。よ。至。り。て。ハ。物。学。が
 る。心。を。未。女。我。家。へ。帰。り。の。遅。さ。う。り。父。母。ハ。家。小。案。事。煩。ひ

むし。妹を門邊に立出せ。更な夜も打忘す。我と結し。天牟と云ながら。不慮の最期と遂し。母上の御るが。此の頃。父上とて。終に世に早去る。父上とて。重なる。心。歎き。おこの頃。のめり。は。忍ぶ。も。苦しく。皆。口。が。不孝の。故。と。為。す。已。責。め。れ。正市。が。直。なる。赤心。と。の。も。し。と。が。て。月。日。の。過。れ。お。け。と。た。な。き。と。に。貧。し。け。家。の。今。と。正市。獨。の。手。業。お。し。と。紛。擾。と。夜。を。終。後。父。の。傍。と。放。と。と。四。方。の。咄。お。こ。う。と。慰。め。は。か。た。せ。父。寝。む。自。と。終。じ。次。励。ま。く。繩。と。打。越。次。織。初。の。と。く。起。出。せ。竈。の。の。と。に。薪。は。じ。く。へ。夫。の。の。當。り。と。も。急。ぐ。父。の。紀。出。れ。を。待。ひ。く。の。茶。と。進。め。火。桶。と。心。を。た。て。父。子。も。朝。の。食。終。り。て。後。と。父。お。暇。を。乞。ひ。或。時。ハ。茶。子。拾。山。

登。了。弓。箭。と。取。り。楮。鹿。を。射。又。お。れ。時。を。鈴。鹿。川。に。網。を。投。じ。釣。と。し。と。魚。鳥。獸。の。差。別。なく。獲。物。あ。ると。れ。ハ。市。に。鬻。ぐ。是。を。り。て。父。の。好。め。れ。物。と。進。め。その。懽。悦。れ。顔。み。て。ハ。己。が。勞。も。打。忘。れ。と。舞。踊。け。れ。と。ぞ。然。る。に。或。時。い。う。り。の。と。鈴。鹿。川。に。至。り。て。垂。綸。せ。し。此。日。ハ。殊。に。風。寒。く。一。尾。の。魚。も。得。られ。と。不。氣。な。れ。折。しも。思。つ。こ。こ。ハ。魚。釣。り。に。鯉。魚。と。釣。得。り。正市。斜。ま。ら。に。歡。び。今。朝。よ。りの。懽。も。散。ら。た。く。一。尾。が。た。と。も。持。り。て。父。の。と。終。も。慰。め。奉。ら。んと。等。打。た。げ。行。人。と。せ。し。と。れ。一。く。の。道。士。忽。然。と。出。ま。り。正市。に。問。て。曰。ハ。ハ。國。正。右。衛。門。正。父。な。れ。者。の。一。子。正市。正。秀。なる。や。正市。い。く。て。い。く。ゆ。も。然。り。神。人。と。これ。何。と。の。所。より。来。り。ま。し。て。人。尊。號。ハ。い。う。再。宣。ふ。ぞ。我。等。

潜顔を知らば又我等父子の名をきりまひ。や子有氣あるも
 いと不審はよと暗に彼道士の有るや成らん道は散りし道
 衣不曲れ杖を突目眸おのづから仁慈を會し西耳は二心の環成
 かけ骨濃は聖のごとく。腰は垢はきられ綿繡の囊と帯昂く然
 として九つとされむ。西市ら落し深く伏し跪きて其のゆゑと云ふ
 也。彼道士又以らく心算の至孝神佛のとも落し通徹汝は授か
 るのわりとて腰を我囊の中より。一の白壁と二枚の守ととり出
 正市と與てしり。是こそ千手觀音の隠家なれど常は信じて
 武運の長文と祈す。苟も私の心と抱くるやなるとん信おるゆゑと
 かふべむ。終は明君はた人名と天下は裏し祖先の家名と奉ん
 る疑ひなし一枚を以て常は常は常と放つゆゑか。残れ二枚の内

一枚を主君と仰ぐ人も奉り。又一枚は主君の内室となれ。も人
 小奉と速くハ七年逢くと十年成出じて必驗ありん。将いの
 白壁も然るべし富貴の人小賣與てその價を以て心算の世は出
 れるをも。いとがみとならば。いとも父子あはれ。あ命と繋く便
 となれ。只今鉤得られ鯉魚と。その仔放らかりて早も家
 小ゆり是よりハ志と立明君を撰ん。勤仕よ。是豫天命の由
 小幸あれ所なれ。む努嫌疑のなつれ。時めや勵しや。功
 成名と。後か。つ。君あ。て。大伽藍を建立し。千手観音を
 と偈仰せ。君臣とも。家門弥増。繁茂と。我ハ行敷居士
 たりと。し。ふ。と。心。彩雲覆道士の形を失ふけ。紫氣たる不
 残。香の薰馥郁。西市奇異のあり。紫雲の消



関正市
行敷居士
達

行敷居士

田村勿吾卷之二



関正市

田村勿吾卷之二

五

行かすお向ひ伏拜しく誓しに然としてありしが彼行敷
居士の教も隨ひ鯉魚とその俵も放らかり授け所の隱象白
璧と押戴と家も守りて細ごとありしりども父も物語れを正
も不思議の昔も逢いのうねと或は感れ或は歡び元來正直の
人なれば其夜更後夜眠しとありしりども孰もありありて
待得て正市も語て曰叔吾先祖と汝もあはるごとく諸侯の血筋
もなす尤も武士の家も産かざり碌くにして人間も後るも
本意なすればとて我の積りてれ歳といひ況や浅質毎學
あく文武よりと今更後悔の詮もなし汝も我も引きて文武の
嗜り箭の道も暗かすべし行敷居士の教も隨ひ意は仕宦
をかりひ主都も登り明君も撰んてけうへ忠義の臣となつてい

も小家名とありしりども埋れ我もやて老後の歡喜らとらふ
んや又予がるの知縁の方に才とよせし如何ともなきとば
若くはと残さばして平にかりひまじし少しく孝道を守らんと
て予に離るるも忍びて却て父の心も違ふべしとらふのなすは汝
京師も登るる二つの習あり一つは山城と大都會なれば明君
と求るる便あり二つは妹はは横死せし歎こそ母人もそのふ
と死せざれども乙女が横死のゆゑこそ病の媒とならるるれば
天喜といひかば則母の歎も同象なれたればこの二つの
と公よらめて大望をかりひら神佛加護の惠あはるる付
と忠孝両全のうねと違ふもあべつれ免よ角に家月人
待んばとく都も外くをじ予も又時を待たず跡より都も

おりのりて。父子再會と遂べさなり。強き予に離れず事次
厭ひなき。明日ともあつね人の命老が才の夕部の露と消後
と父ふ歡ばあられるも叶ひがく。將耐ハ失ひ易きれば終ある
何一志とも遂せして草木ととも朽果人の生るがら死せぬも
同道なるぬ。汝ハ智勇と備とれば多言を述べぬれども予
誠心を今々に語り父とあはれううハ其胸と量知れどと余我
なり父のこゝの業。正市ハ感敷肝は銘じて回答え胸はせまり
ておももども。涙泣み袖をぞあほりけぬ。漸ありて正市ハ落涙
次ありぬぐひ。席を辟跪て答へし。某性魯鈍にして道よは
といふも如何ぞ禽獸とひとしく。天地の間よらんや只今の教
家。村雲と拂く天日とえれが如く。去りがらいつと定れるも

なり。暫く父の左右を離れまじりせり。遠へ雲井の旅路あり
かは。日毎夜毎ハ他人の手は養ふと多ひ。尤も公の休は際
もなめられれと屢るぬ。けりての重れ作をいふこもあはれも又不
孝の罪の重けは。是は角ふ命は志とくハ一先都也上り二言
の大望その宜ふ随つて計つじ。とくハ旅行の用意もなきとべれ
ど。さうてたふ貧し家家の少くも金銭の貯もなれば。はじ當り
て。いふも。せんせんをたそ口惜たれと。いと打志厚きて物詰ふ
正右衛門正久とて。曰汝もこれなりや。彼行敷居士よりうけ
うけ白壁こそ。教のごとく富貴の人よ賣りて。大望の助らせ
ふ。いふも。白壁と全して。相如か昔に效るもや。夫と漢土これ
ハ倭のよの緒の結ぶらじの親子のため。早くに賣代さす。

夫これ用意こそ行要なれと。ありけはは正市と爲とひ。實も
 件の白璧と貧と家お侍も。何うせん幸なるか。正市は
 何不足なれ長者といふ。かれ宝貨と好められんれば。か
 て話入んと白璧と袖おはし。正市として急じ。福も
 あり我父那よろこび多くし。彼白璧はか。至りし。百五十
 枚の銀子よ替これ。則父お奉れなり。某旅行の用を
 知らむ。ば。明日も族も打立。と。勇こい。右衛門
 も同。去脱の眉をひく。然。ば。明日も。将。その銀子
 と我の少く。得て。此村里の。方。に。いふ。も。多
 ぞ。汝と旅路。お。り。の。珠。の。都。の。と。め。れ。り。
 日。の。入。用。も。多。う。く。武具。の。用。を。め。り。け。は。二十枚と

我方お留めおと。残。と。汝持行。と。理。つ。した。父。が。言
 正市何も迷惑。と。は。言。に。け。し。り。ま。し。く。漸。や
 七十五枚。げ。半。を。こ。ら。て。意。を。調。へ。り。是。と。之
 れも正市が至孝の徳ぞありが。頃。し。も。時。兩。月。の。夜。の。ま
 か。し。れ。も。今。宵。の。旅。の。門。出。ぞ。と。父。子。觸。涙。う。り。打。行。ひ。ま
 りも中。く。母。別。の。袖。と。老。が。身。の。正。右。衛。門。を。り。つ。再。會。の
 時。至。つ。んと。包。涙。の。浮。め。れ。と。あ。れ。袂。お。つ。ら。ん。正。市。も
 お。り。が。声。を。り。て。曰。某。都。よ。上。り。彼。所。母。お。ら。は。さ。る。ぞ。
 早くお便りせん。母。速。よ。都。母。登。り。め。ひ。某。の。孝。養。を。し。じ
 め。つ。ん。り。ぞ。願。し。け。と。と。い。ふ。に。冀。お。正。右。衛。門。曰。く
 時。至。り。て。再。會。さ。べ。れ。お。我。事。を。さ。る。が。如。く。健。ま。れ。を。聊

と海と残さるる形。只頰にしは。先小公と云ふ語りし敵の
行儀と仕宦の類ひ。首尾よく成就するんことこそ予が志所
なれど。此事ども整正す。予と譬死せられども。猶やこれ公地ぞ
せぬ。能く公の銘せよと。父子と入まなれ物語。夜とあつぐ
と明渡す。そや東おかどろひのいのちのまのちをば二人と驚え
時朝ぞ至りぬ。りりや名残の盡せじと。門邊おくら出るるが
正市又いらく何れと公忙しく。中残りけるも。其成長し
より父あもあらしめと如く白鶴翁を師と憑大恩浅とこ
あざされむ。此度みやこふ登りぬ。暇をあもまうへたふ少し
も急ぐ旅されむ返とも。此事よれお供くくるるべし
櫻都より隻楮ともよとべし。頼とけむ。正右衛門と

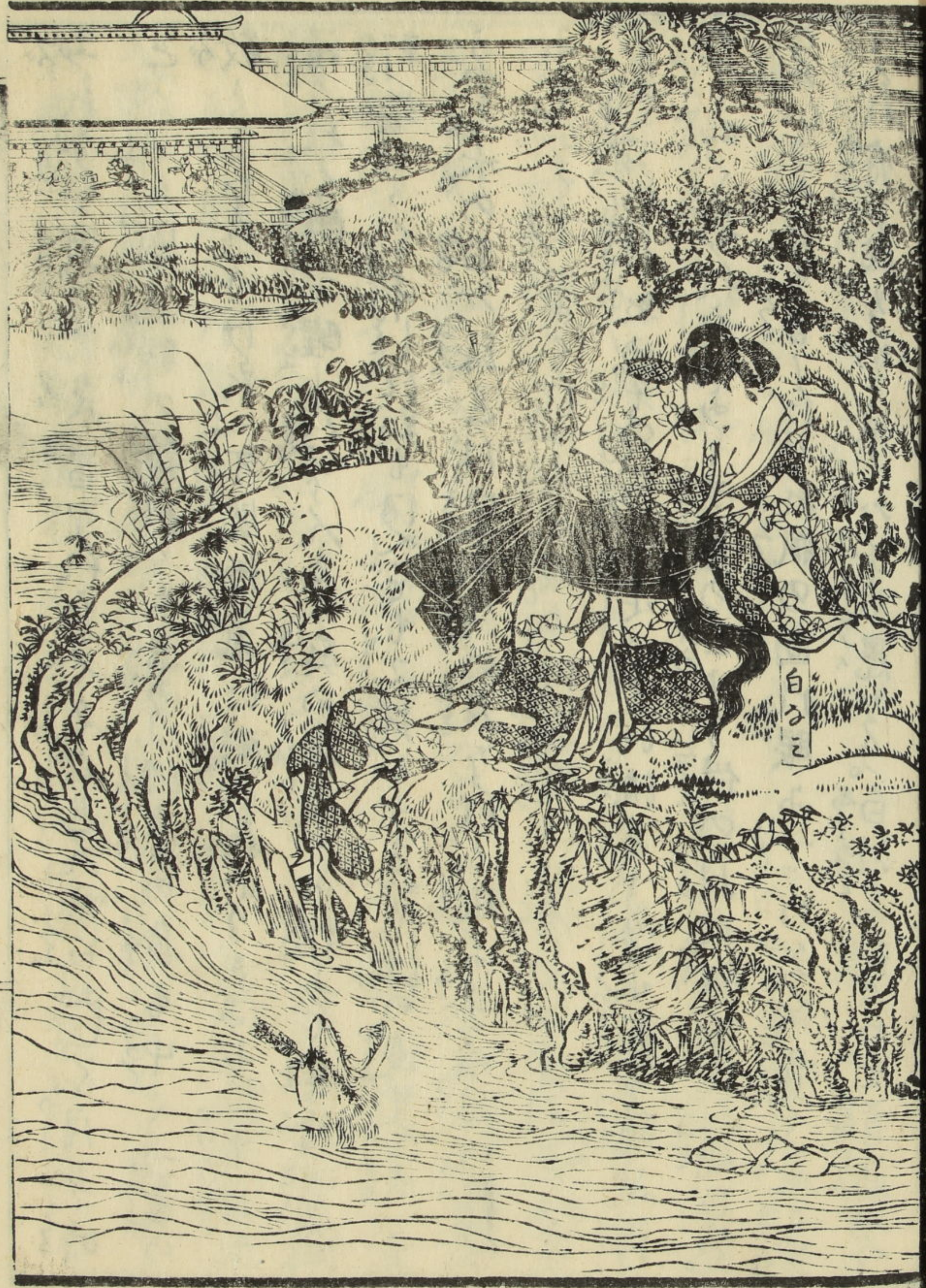
散る。我よれお供くあん。早に打まじと。ややくして正市
の後お廻り。是彼と世話も誠の親の恩。旅荷とともお打
荷ひ。都の空へと急ぎさるり。

第四回 異石の能

儲も弓木甲斐守照門を借かりあひぬ。延暦十三年。小倉
山の御狩の時已が射留人とせ。小狐を田村磨逆を殺す。海
より。狩場の外お放りて。我手柄を妨げ。別天皇より恩賜
小其才の面目とやどにし。されぬ。おりへぐ公悪し。いりあも彼
に幸めえせ。くさ入とと。お奸計を廻らせども。なまを
便も形く打過。れが照門が長臣岩岸權大夫と云ふ者の子
小刑部太師廣成とて。歳を二十ふとされども。其聰明伶俐こと

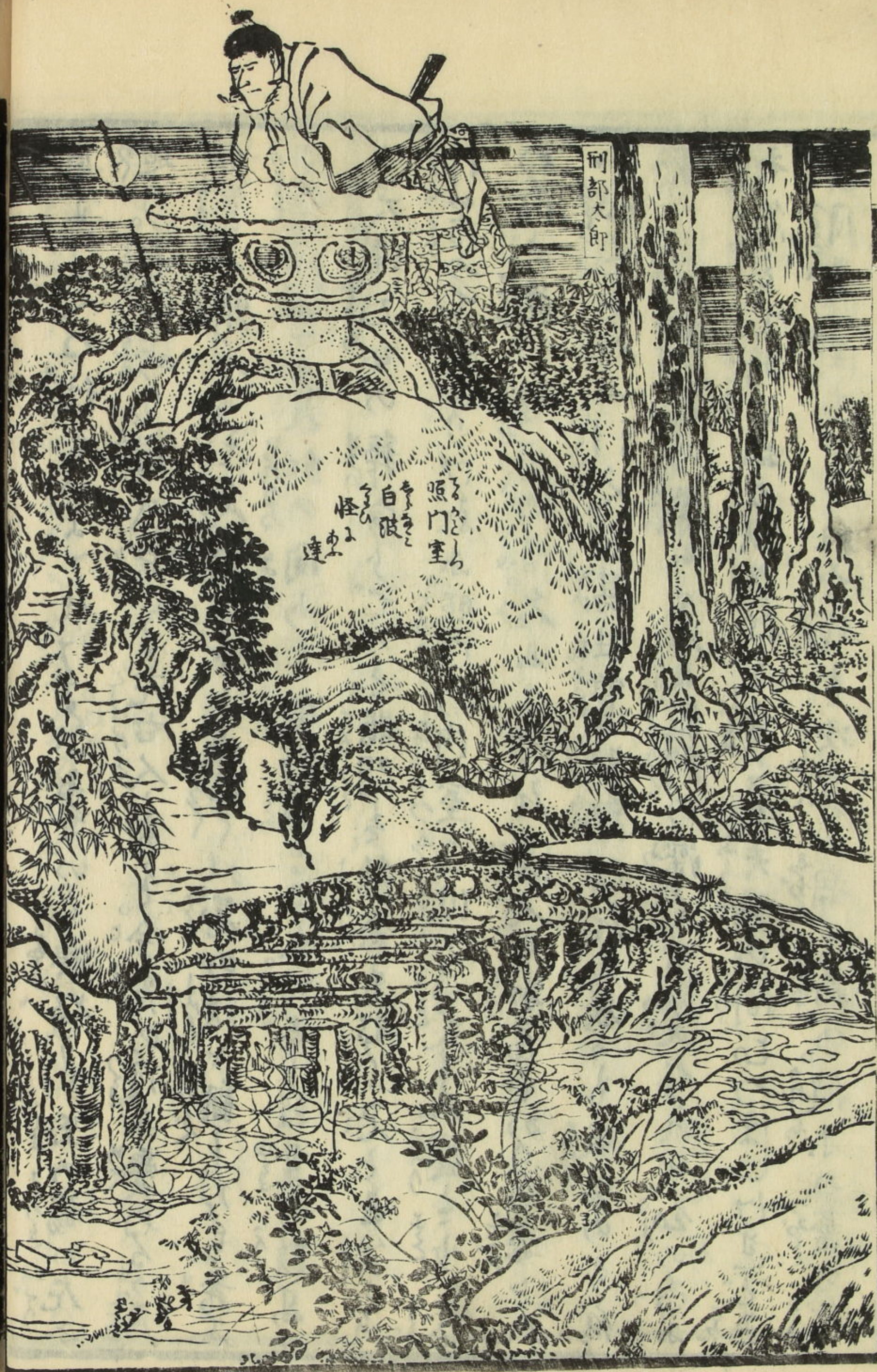
衆人小こへ面色墨を流せれ如く月の丈六尺あり眼人々
射て頬赤の痣を印し胸あり籟小根の心と合ひといへども
尊く色小顯さして却て世しく風流の道小遊びく。朋友の交り
も敬讓ていささかも争ふ事なき。加量も山を枝の手つきあれ
ば照門厚く是と愛し。国内といへども刑部太郎と日夜憚るる
形く出入して深く主人の心をほり。頃しも復の夕ぐれありしに
照門夫婦をこじめ刑部太郎もさるるもに局左右人圓居し
て酒宴半の頃なれが。月漸東方小登りて庭の面を照し。池も
臨りれ古木の柳も形水小動きて青龍の登れく怪き若む
まし石燈籠と影長み人の歩むくと疑ふ螢木蔭小消のり。
魚踊る月のさやけれを知ら。盆のありとは風小消夜の凍しこい

目もえへね秋もかよへれけりひあていと興ぬく玉の鶴ハたふ
廻り。右も止り。媚々然なる左右人もも。今宵の月も愛ゆる声
も麗小唄もあそ。又香あそ色くれ。花の袂を翻し。なら舞あ
豊衣の乱さるれ紅の間あり腰の白さる時あね雪の散る
う。天津乙女の舞あそてて。照門を餘念もあけえとさすれ。
拈笑あて居りけれ。照門の内室白波とせへ。盛を少しこ
われど。花の顔月の眉名もよてれ美人も恥あむかりの姿なれ
と心もそれふりて其性質嬾亂がれ。あうも嫉妬のこころ
深く。左右人本の舞らるる。照門の深くも愛あれ。公の内も
打怨きて。暗もあひたれと。今こそ夫婦の間はしけしとこ
ふ。月日に関もなれ。我も次女も凋る。花の。彼ホハ蕾の咲



白
白
白

白
白
白



刑部大御

照門室
白波
怪
連

田木物語卷之二

物れ今と盛りのみ香なれを。ええらえんも口おしく。月と暗
 是ふ心と闇。胸の鏡れらら曇り。酒宴の奥も中く小憂の
 教とぞなれりけれが不圖酒氣に耐えられありさへめて幸月も
 清たれを酔を醒し候とんとて庭の飛石らら候めて其所此處と
 軒端ららく行しにおもほくとも又月あうれと池の邊まで歩くと
 うし。水の面氷詠とば空と一の月なれど水も二の月の浮り
 あぞいと不審なれやとど或と仰向或ひ俯して見るとふ。そ
 一と二の月影のその一と足りといは流しより水面も鏡氷浮
 り如くおれむ。いやく不審のふより件の月れ裡をば見けれむ。
 といふもさも苦しげなれ狐の面れ眼ふ一の矢貫貫と血も塗
 り有さほと。おそ病しなも思なり。白波とあがりて首筋ぞう

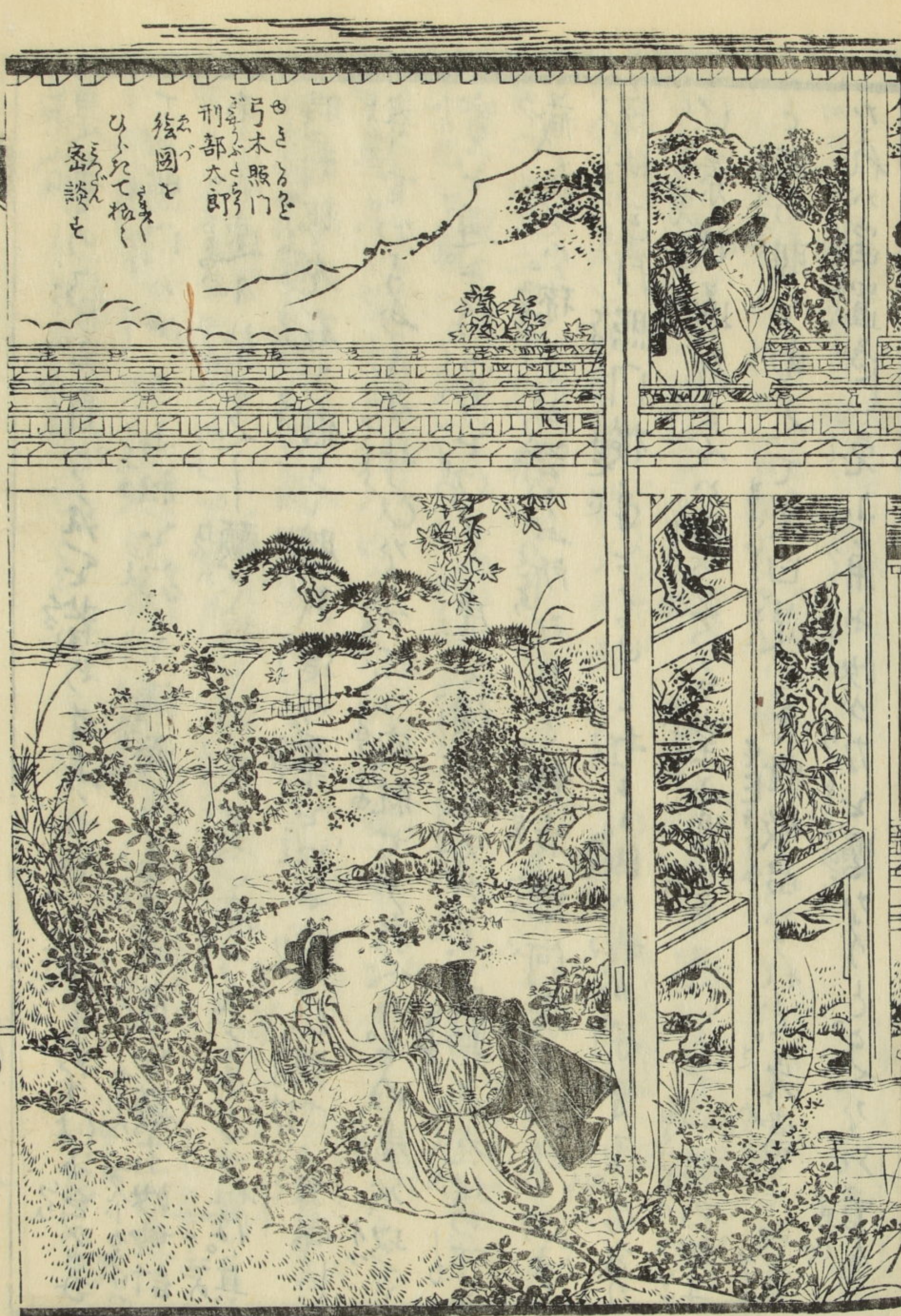
として。流石氣強と公母も頻ふ凄く五輪も震へて。いそとこの
 道へ歸らんせし村雲月とえどりて。あかりもあふね闇と
 形りかとも行む杖もひ茂て。さふ過とば岩石高し四方
 八方道もなす。綱の中なれ魚もと縁ど。洩て土もさかたも
 あり。十方おれれてま居る。かくて此方へ夫とも知れぬ酒宴の
 奥の奥更な夜もうちら亡心と照門いやく笑はれみ入る。香て
 と見ひらうとひて入る。香席上酒の池とたり。内の林ととくけられ
 風と白波のえへがれお公けと。いふも白波をりぐさへ行
 ちあや先お外面小酔成さして有つれがよも女子の身
 の獨この廣庭の奥ふかくも行はれされは。さへめて。まめゆと
 履出とれ庭木履もえへがれは池の溜も氣ぼり。い

お岩岸刑部いわがしきりょうぶ入いてままれと。照門しょうもんのこゝろ声こゝろもも應こゝろじて畏こゝろりさまりし
 ぬと刑部けいぶ太た郎らうと足早あしはやふ。石いし俣ひひ廣庭ひろにわどしと走まり行いぬ
 されと打岡うちおかけられ庭にわの面月おもつきも木きの間ま傾かたむきて半なかを雲くも
 覆おほふれバ所ところとれ月影つきかげもさや彼所あそこと尋たずめれど更さらふの
 影かげもななく。のままりに需ひて假山かりやまの右みぎに瀧壺たきかのこゝろ此こゝろ方かた近ちか
 分わか入いる。白波しらかみのこゝろ只ただ獨ひとり忙いそ然しかとして立居たちゐる。夫おとことこゝろ
 より走まり倚岩いよいわ刑部けいぶ太た郎らう洗せん迎むかひおままりたり。何なんとこゝろ
 夜中よなかも只ただ知しり此所こゝろまで尋たずりままひし。君きみもも侍さむらい兼かねひ
 心こゝろ早はやくに尋たずりままへし返かへともも何なんゆゑも爰こゝろも獨ひとりとこゝろ
 らみぞと尋たず問とふ。白波しらかみのこゝろ方かたと獲生とくせいとれ公地こうちとて件けんの
 事ことも物もの語ことばとて刑部けいぶ太た郎らう打うち笑わらひかかれ御園ごゑんの度ひらりれば。

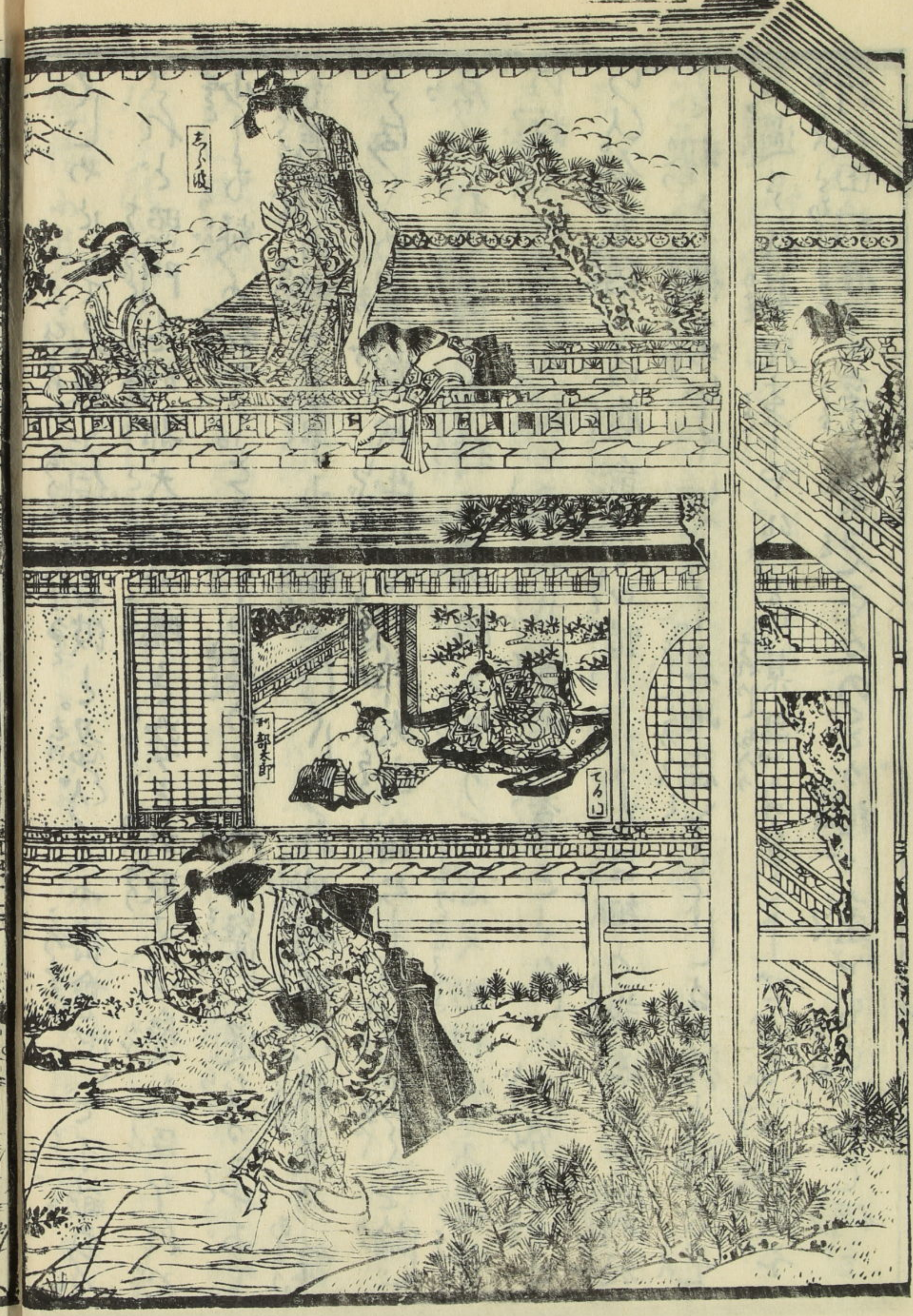
狐狸こりの住居すまひもああれななららぬ。去さむらら危あやかりれ事ことなりしと語ことば
 あり間ま入いれ月つきの木きの間ま返かへりままり照てるのれら白波しらかみ始はじめと
 らら海うみを休やすめ。ああるるととせししの類るい。月つきの光ひかりも王おうの艶あや相あ對たい
 くれ有あるははふ。山やま岸がし刑部けいぶと今更いまさらもも初はつれれ感かんも君きみの妻つまも
 我われと我われ方かたをを憶おぼれも。跡あとより意いの責せめめば免まやせん角かくや
 と公こうも空そら小悦こえつ惚とと。ままりりみえととれて連つと帰かへることごとに
 打忘うちわすととれれ。原はら来きた大膽おほたん不敵ふてきの倭人わにびとなれれ。頃ときも謂いく大
 丈夫おとこ何なんぞ少すくしく我われを守まもる。一ひと人の女むすめもも苦くるしめ本ほん意い
 を遠とほざざれれ。やああれと。必かなひ定さだめて袂たもとをひひく。ああれれととまま人
 此瀧壺このたきかの山やま岸がしも碎くだりて寄よれ白波しらかみも。君きみと我われとの中なかもああららい
 小清こしみずひととままりりとや。此こゝろも海うみどど小叶こはひひななば今いま死しれれももいいふ。

とあひもあはれぬ悲暮の言ゆ。白波を当岸刑部が顔
 見く。只惘みゆきれて又も驚く。さうり。去る。あまを
 お慕ふ。公といひ。吾唯今の難。我をも救ひ。これ恩も浅く。さ
 など。おりのあまはけ。忽蟻乱の公。鼓動して。浅狭や。終小刑部太郎
 と。さうり。なれ。契を結び。おれが是を。一つの。み。此。出。おる。つと。種。と。を
 成し。さうや。去。後。再。時。刺。う。ら。と。白波。刑部太郎。い。ご。お。れ。
 酒宴の席。再。度。ア。た。れ。かり。つ。座。席。も。静。ア。く。人。追。て。尋
 求。折。ひ。れ。白波の。帰。ア。ま。れ。小。照門。じ。め。安堵の。さ。ひ。と
 ぬ。其。故。と。ゆ。あ。奇。怪。の。物。語。也。皆。人。眉。次。聾。め。愕。然
 たり。び。とい。あ。者。な。し。照門。ハ。ぞ。え。お。れ。お。ぞ。んと。せ。し。が。た。あ。ぬ
 風情。お。り。て。は。して。此。夜。の。奥。と。こ。て。み。ま。り。刑部太郎。ハ。この。目。を

と。じ。め。じ。て。人。目。を。伺。ひ。白波。と。忍。び。く。小。密。會。せ。し。ぞ。不。敵。ある。
 されど。照門。を。刑部太郎。が。醜。と。姿。と。云。取。り。け。愛。れ。臣。な。れ。バ。
 少。し。も。疑。ふ。公。な。く。さ。う。も。君。の。さ。を。察。し。逆。なる。み。あ。て
 も。照門。の。好。り。事。少。く。諂。と。は。く。し。た。れ。或。時。照門。徒。然。の。後。
 さ。は。く。の。畫。圖。ハ。出。して。刑部太郎。諸。とも。に。其。あ。く。と。論。
 居。る。お。小。過。御。狩。の。畫。圖。お。至。り。て。忽。又。田村。鷹。小。遣。恨
 の。救。い。お。り。ひ。土。彼。が。為。お。我。を。柄。と。棄。て。し。ハ。大。勢。の。中。と
 つ。ひ。今。も。猶。その。腹。愈。ど。口。惜。く。な。く。巨。細。と。説。あ。め。ま。刑。部
 を。却。て。微。多。い。く。さ。ら。く。君。此。怨。と。し。し。ま。ん。と。お。す。は。是
 小。過。は。易。に。事。や。ゆ。づ。某。愚。ろ。の。と。中。せ。も。一。の。計。を
 行。ハ。田村。鷹。小。幸。と。あ。え。さ。る。の。こ。ろ。彼。が。家。も。亡。さ。し。何。ぞ



由木照門
刑部太郎
後園と
ひらて松
密談と



是等のふも自ら後を苦めりあやと。ふもなげふ云を
 へ。照門へ渡りお詔をばく満面お喜悅の色を顯し。汝妙計
 あら。速小成さ。願くはその良策をばんとありければ。其
 時刑部左右を顧み膝を進め。拳をば覆ひ。照門が耳をじ
 寄て。かろふふ斗ひなをば成し成就せむべし。その虚を以て
 實と避。その実を以て虚を伺ひ。九天の上お動と九地の下の
 藏をば。孫子がそらぶ所なりと。辨舌懸河をさぐれば。ごとく
 説法は。照門様手をとこと打。汝ハ我が子牙子房あり
 孫素懐遂れ人ハ。褒賞と望。少しうと。ばして一塊の銀子
 と時の服をわけて。又曰。是こそ將微品なれど。先當りの賞
 なら。苗置を。免小用。汝が力と憑なりと。うなれ。首尾小

山岩岸が。岩をも砕く勢の眼の内ぞ。あそ海。柳此岩岸刑部
 太郎度成を。己か智術と云力量といひ。珠。邪法の妙と極め
 道を急ぐ時。縮地の法を行。その往返の早れ。飛鳥の如く。
 世の人。是とりて韋駄。天刑部とあ。名せり。又刑部が家小奇
 異の寶。二ツ。所持。其。一ツ。一葉の小判の如。青黄
 け色。と雜へ。これ石。あて。暗。魔魅の氣を合。此宝。病の人
 屢。其。を。放。弄。付。病も愈。とい。又。その
 代。掌。能。人の。餓。を。凌。然。も。灸。て。掌。と。毒。氣。五
 勝。入。旬。日。を。過。して。必。死。と。又。一。ツ。の。金。銀。を。鍍。千。鳥。を。鑄。る
 小。柄。ひ。して。い。う。か。れ。人。の。名。假。也。此。千。鳥。其。持。主。危。小
 達。時。を。必。声。を。發。と。と。古。今。稀。な。れ。二。品。な。れ。刑。部。は。是

父より譲り得て常不尼時も身は故らう。それハ千万人ハ
 物の教とせざれど。老母ハ温純と表してその行状を人々ハ
 大悪不道ぞ多うりた。こゝ頃正右衛門正久が娘乙女を身ハ
 殺せしも。此岩岸がなせし業とや。されどその刻件の小柄を
 取落し。暗中尋ねるとひとしつとも。その甲斐なく公の御もら
 へし。が人ハ語らんも失面目なれば。空あぐね顔あて居りける。
 斯く刑部太郎ハ照門と密計を約せし目より。何とぞ目見し
 此功を立。いよく照門母心を著させ。終ハ照門をも亡人とし。
 よろご我のめとじて白波と公のまゝに娼婦人と深くも討つ悪
 逆の其牙の末をいうなう人。是より咄も。諸も関正市正秀ハ住別
 園と雲路の跡ふえく。足お仕と行やどに其所としもね旅衣

不日とや山城の愛宕郡平安京ハ名おろれがまじし。越予
 繁栄あて西も東も驚と並へ貴賤となり老ゆとなり行違ふ
 有さばハ豊に實ハ花の都なりと。深くも感づ。夫より三條橋
 の溜池の由緒ありけれ世代傳といつれ者の方お足と止め。此
 世代傳としつれハ父ハ武士の筋目ありしが。次身ハ落がし今ハ
 古器用を世渡として小厮傳婢両三人召仕ひ妻と河取と云
 娘を小葉とて夫婦ともハ老實なれりのめて正市次いで
 り。何れと心ハ附て且暮の世話もいと懇厚ハ他するも
 正市ハ正市も公ハ休め此度仕官の望れ。め都ハ宅正し
 り。物詰ふ。たわらハ我方ハ公ハ益お寛々と逗留あり
 て其のうと叶へる人など。親戚も及びがこれりて。心愈その

志を感じ。是より日夜大望成就を斗々千手觀世音を謁
 仰去々急をるる好うりける。ある時表か一人の武士ありて。
 主と宿小住れやと同小世代他走り出て。主の身りまふ
 ともあふは。失れをなせりとして座席かむ久烟茶の礼も待りて。
 世代他日頃日へ絶て音信もなうし。いふなれは今日と歩ん
 うりし多ひねと打笑て尋ねる。彼人答へ。さればは日頃日へ
 風の心地して邪氣のこりふ犯と打所なれが頓小平愈まうま
 打捨金かた子細もありてまうりね。さう頃心身あも粗と語
 正ごとく。我家おけりる寶貨少て。持て主の危おすことへの
 聲あふと。千鳥の小柄と一斤の薬石なり。常小我身か本
 色とりとも。此度已事なれ金銀の入用ありて。色くこと此の

くけの戈覺もまじははと。調ひがう。さし當りては談多た方
 も好く。いふも遺憾をわれど。此茶石を賣て其るを調ん
 と。扱こそ持たしなり。そも此功能の尊れこと。病の人此名
 と其名を添へる屢弄とた。いふなれ病も愈とといふなく。
 又その代掌時ハ社人の餓を救ひ精神も常より爽なり。是は
 けて延壽石といふ。願ひ價よく買求めまうれとて却る竊小
 多うて掌時と毒氣盛小人の才を傷れり。語らば言は
 巧にして余我あもも憑たれあそ。世代他答て尤あふ。さう
 又せりとして。是を看に二三すもあれべき梨地の小箱を紫
 の房付に紐めて文とて結びなせれが蓋は月且ハ敬く
 ちく錦繡の囊も藏ぬ。是を用けハ青黄の色を交へて茶



刑部太郎

世代化

七



正市

岩岸
刑部太郎
道具屋
世代化
方

日本外言卷之三

九

石なり。世代他又しらく。實も疎なる寶貨なれど未其結
 の妙なるを知れば敢て賤しく買求かじし。いと真なるの
 へいごも先く返しまちりされたりと云も終らざれば。此は
 其證をいせしやんが此家の内又ハ誰人あもせよ空腹なれ
 人は是を嘗る時の忽ちその證をいづしといふ。世代他若く
 幸あるうね某今日の朝まがれより。何と云と繁劇あてい
 夕餐前あつ。頗腹空うえん。免多や直みこれを嘗て試ん
 とて。其後數度これを嘗小曾てその證もなれば半の信じ半
 ハ疑ハ折々。不思議や次第く小腹充て食とらふ。公地し
 今の空腹を忘るも氣力爽なればおもくを積むを打。こ
 いうめも此灵石。真の寶貨なり。えより深疑つていひしあめ

福と亦世渡りれ常なれど其實ハちとざれハ交易もまじか
 不斯すてい言しなりと老實なれん。或ハ面なく。或ハ憫
 然るうらやみ彼人打笑て。いやとよまのこ。言をけしし。ひそ足
 商家の常なれば証をいふ。尤めは。いふ買求まらん。小
 やと薦む。空もその証をいふ。か。求得。とて。價う。と
 説教。以金七斤。百十二。み入て。彼人ハ歡び。又も近き。小尋
 中さんとて。ゆり。正市ハ物の際より。始終。聞。居。れ。が
 彼人ハ。才の丈六尺。あ。は。して。面色。墨。を流。せ。れ。如。く。眼。中。人
 を射。頬。一。の。黒。痣。あり。て。こ。も。怖。げ。あ。ら。ず。粹。香。ハ。我。貢。獲。張
 成。辱。り。堂。く。な。れ。威。風。な。れ。公。の。内。先。十。し。ハ。九。ハ。これ。曲。者
 と。思。ふ。ど。何。氣。な。れ。ま。あ。て。世。代。他。小。向。一。只。今。物。語。も。い。し。人。ハ。是

何れの人なれやと問ふ彼こそ當時富貴を頼りて專驕
極まる弓木甲斐守照門の家臣岩岸刑部太郎廣成とらふ
なり。是もよかぬ人なれど我の商人のふなれば
此を毀れて世渡りか言ひまてなりなると語り
行よりて其夜より獨竊におり人らく先は彼刑部
物語を笑げば危小臨んぞ聲を發せ千鳥の小柄と所持せり
としし我拾ひしれもふきの小柄あり世の千鳥と鑄
小柄も何やも有るなれ疑ふもあらず何とやんか
かてあもえぬれわれ我小柄も危小臨んぞ聲を
攘ころりて便もなし去りて敵の面をえねば
ぬ。されど仕官先みして後敵を尋んそ一度命と君

たてまつりて仕官され入りのいふにせざれとゆい
宜う忠考両ながら全と事難しとす所なれど又耐至
らばなすはした物おもひはししく敵を討つる仕官の
縁がひ後るも力もあらずと免小角に心どふ止さんば
を我れ便もあらずとさおきた物憂旅館より身を
曉むいとも目へ冷渡りて眠りあはれど残人の燈火影
舟の行末もおりひ出され彼行處居士より授けし
篆を出して教度お戴き精神をこぼして大堂成就を
祈りてはりて間眠り何所もあらず紫雲蔽ひあり
四方も薫りて雲の裡よりたるる玉の声きく日
こと切なれば告るなり抑仕官の願ひがふ叶ひな

田村物語卷之二

得^うる^を。讐^{あや}が復^{かへ}た^り。天命^{てんめい}の至^{いた}る^を早^{はや}く^に知^しる^を。
忠義^{ちゅうぎ}を盡^{つく}す^を。と教^{おし}め^る。とそ^の人^{ひと}と旅^{たび}寝^ねの夢^{ゆめ}とさ^らに^しる^を。
正市^{せいし}と^いふ^は是^{こゝ}を^まじ^く日^ひ頃^{ごろ}告^つげ^る。子^この^ま観^{くわん}音^{おん}の^つ告^つが^らし^む。
と伏^{うつ}拜^{ぱい}辱^{じやく}な^らに^あ涙^{なみだ}を^ぬけ^しけ^れ。か^つし^て後^{のち}に^ひ只^{ただ}管^{くだん}仁^にが^ら。
ち^とれ^とぞ。

田村物語卷之二 甲

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

